

抒情詩人としての蟲麻呂

青木生子

はし が き

蟲麻呂が万葉集中異彩を放つ叙事詩人であることは、つとに佐々木信綱博士が「和歌史の研究」の中で「叙事詩人高橋蟲麻呂」と題する一節を設けてこの点を強調されたことからはじまり、今日では略々定説となつてゐる。私がこの拙稿の標題で、あへて「抒情詩人としての」といつたのは、蟲麻呂の歌が叙事詩か抒情詩かを問題にし、叙事詩でなく抒情詩であるといふやうなことを、真向から取上げようとするのではない。もとより万葉集には純然たる叙事詩がないことはいふまでもないので、叙事・抒情の言葉借りるなら、万葉集といふ抒情詩の中に、多少の叙事詩的要素があるといふ程度である。「叙事詩人蟲麻呂」といふのも従つて相対的比較のないひで、その意味では一応肯はれる。それにしても猶、その叙事性の検討をする必要があると同時に、更にそのやうな蟲麻呂の歌の本質的意味、或ひは詩的態度ともいふべき問題を考へてみたいのである。つまりさういふ意味での、抒情詩人としての蟲麻呂を考へようとするわけである。

(一)

蟲麻呂の作品で現存するものは、藤原宇合が西海道の節度使として赴くのを送つた長歌一首とその反歌一首を除く外は、すべて蟲麻呂歌、及び蟲麻呂歌集中出としてのせられたものである。これらを従來の説に従つて全部彼の作品とみなす時、蟲麻呂が叙事詩人といはれる所以は、彼が伝説を多く歌つた歌人であるといふ点に専らある如くである。それらには説話のもつ事件、人物が精細に具象的に描かれて極めて叙事の要素に富んでゐることは、同じく真間手見奈や菟原処女をよんでゐても赤人や福鷹、家持等のそれに比べはつきりといへるのである。だが、そのやうな伝説を歌ふ作者の心とでもいふべきものは、はたして何であらうか。そこで彼の歌の中で、彼の心を最もよくうかがひ得る歌から、まづみてゆくことにする。

筑波山に登る歌一首并に短歌

草枕 旅の憂うれひをなぐさもる 事もあらむと 筑波嶺たけに登りて見れば 尾花おしなちる 師付しりつけの田井のに 雁かりがねも 寒く来鳴きこきぬ 新治しんじの 鳥羽とりはの淡海あわみも 秋風あきかぜに 白浪しろなみ立ちぬ 筑波嶺たけの よけくを

見れば 長き日に 念ひ積み来し 憂は息みぬ (九卷一七五七)

反歌

筑波嶺の緬廻の田井に秋田刈る妹がり遣らむ黄葉手折らな (同一七五八)

この筑波山の歌は、その自然観照の細やかさや、象徴にまで高められた豊かな季節感の文芸的効果については、既に岡崎義恵博士が、「万葉集における感動と鈍照」(『強権論の歴史』所収)及び「万葉集に現れた季節」(『古代日本の文化』所収)の中で推賞されたところである。

そしてこの一篇の中に漂ふそこはかとな旅の憂ひの情は、これまでの叙景歌などにはあまり出てきてゐないもので、赤人の叙景歌などより、或意味では一層抒情詩風である。ここには秋色の筑波の風景や、秋田刈る妹への愛に、自分の心がしばし慰められてゐるところの、さういふ自分の更に奥の心の愁ひ、孤独とでもいふものが、しづかにいだかれてゐる如くである。それは、又黒人の旅情の流れを一步深めてゐるやうな情勢を示してゐる。序でながら「武蔵の小埜沼の鴨を見て作れる」

埼玉の小埜の沼に鴨を翼さる己が尾に零り置ける霜を掃ふとならし (九卷一七四四)

といふ旋頭歌には、寒夜に小埜沼のほとりに宿して、ひとり鴨の羽ばたく音を耳にしてゐる作者の旅情が、そくそくとにじみ出てゐて、芭蕉の「病雁の夜寒に落ちて旅寝かな」をすらおもひおこさせる。更に次の歌をみてみよう。

霍公鳥を詠める一首并に短歌
鶯の生卵の中に ほととぎす ひとり生れて 己が父に 似ては鳴かず 己が母に 似ては鳴かず 卯の花の 咲きたる野辺ゆ

飛び翫り 来鳴き響もし 橘の花を居散らし 終日に 鳴けど聞きよし 鶯はせむ 遠くを行きそ 吾が屋戸の 花橘に住み渡れ鳥 (九卷一七五五)

反歌

かき霧し雨の零る夜を霍公鳥鳴きて行くなり何怜その鳥 (同一七五六)

ここには伝説歌人らしく、まづほととぎすの生ひ立ちからよまれてゐるが、それはうぐひすのかひこの中に生れながら父母に似て鳴かぬ孤独なほととぎすの生態によせる蕨麻呂の孤独な心が、ほととぎすの、以下の自然風物を伴つた美しい描出の背後をひたし、更にほととぎすへの「遠くを行きそ云々」のしめやかな愛情となつてゐるのをしる。それが反歌に至つて、雨ふる陰鬱な闇夜に鳴きゆくほととぎすをとらへ、長歌からの閑聯でその悲痛な運命を思ひみる愛隣の情が「あはれその鳥」の結句の詠歎とまでなつてゐる。あくまでほととぎすといふ自然物に向けられた詠歎であるが、その思ひ入れの深さは、あたかも自身の沈痛な心情吐露と一枚になつてゐるのである。このやうな彼の心を私は更に次の歌の中にも如実にうかがひしることが出来る。

河内の大橋を独去く娘子を見る歌一首并に短歌
級照る 片足羽河の さ丹塗の 大橋の上ゆ くれなゐの 赤裳 襦引き 山藍用ち 摺れる衣著て ただ独 い渡らす児は 若草の 夫があるらむ 櫃の実の 独か嫁らむ 問はまくの 欲しき 我妹が 家の知らなく (九卷一七四二)

反歌

大橋の頭に家あらばうらがなしく独ゆく児に宿貸さましを (同一

七四三)

河内の大橋をゆくをとめを蟲麻呂特有の生彩な描写で歌つてゐるが、をとめのただ独りてゆくその姿に「若草の夫かあるらむ 櫃の実の独か蘇らむ」と、をとめの運命のやうなものへ想ひをよせ、やがて「間はまくの欲しき云々」と、をとめへの愛情になつてゆくところは、ほととぎすをよんだ心情過程と甚だよく似てゐる。反歌で再び「うらがなしく独りゆく鬼」といつて、作者の心情の焦点が、ここにあることを示してゐるのは、「あはれその鳥」と又同様の作者の抒情に外ならないであらう。勿論、筑波山の歌も、鴨やほととぎすの歌も自然風景や動物といふ物、娘子の歌ですら題辭に「娘子を見る歌」とある如く、物としての対象への蟲麻呂特有の觀照の細やかさ深さの程を示すものであるが、その基底をなす心のありどもいふべきものが、これらにはまぎれもなくうかがへるのである。

(二)

さて、蟲麻呂の歌の題材を大よそに分けると、次田潤氏が万葉集講座(第一巻春陽堂版)で説かれてゐる如く「伝説を歌つたもの若しくは伝説的色調を帯びた歌と、旅の歌若しくは旅立つ人に贈つた歌」との二種類になるかと思ふ。たまたま前にあげた例歌も筑波山や鴨の歌は旅の歌に、ほととぎすや娘子の歌はどちらかといふに伝説風の歌に属するといへよう。次田氏によれば、彼の作品三十六首の中旅に關する作は、二十一首、伝説に關するものは十五首で、勿論そこには作品の大小、及び価値とかの実質的計算も入れなくてはならないが、ともかく旅の歌の總數の方が多いのである。そこで彼の歌における旅の意義をも少し深く考へてみよう。蟲麻呂は奈良

の都に住んでゐたらしいことはわかるが、常陸をはじめ上総、下総、武蔵の地を旅行し、或ひは駿河や、摂津の難波、葦屋や又河内、丹波の地方に旅行してゐる。この旅がたまたま地方の伝説をよむ契機ともなつたことはたしかであり、さうすれば彼の歌で旅を製作動機としてゐないものは、ほととぎすの歌位である。但し、旅と伝説との關聯は彼にあつては、ただそのやうな外面的なものだけでは決してなかつたと思ふ。

彼の歌はその土地土地の地名をかならずよみてみ、その自然風物をものしてゐる。極めてその土地になじんで歌をよんでゐる。前掲の筑波山の歌の中に彼の旅愁の心をみたのであるが、彼の旅愁は、「大和には鳴きてか來らむ呼子鳥家の中山呼びぞ越ゆるなる」(一卷七〇)と歌つた黒人や「沫雪のほどろほどろに零り重けば平城の京師し念ほゆるかも」(八卷一六三九)と歌つた旅人のやうに、歸るべき故郷をもつた人の懐郷の情とはややちがふ。彼は筑波山の美しい風景をみるこゝによつて「長き日に 念ひ積み來し 憂は息みぬ」と、旅愁をそのまま、その土地とのなじみ合ひの中で慰め、愁ひをそのまましめやかな安息、喜びとするやうなところがある。それは別に、彼が旅する人の爲に送別の意——還り來る日待つ意——を詠んだ歌(九七・九七二・七四七・七四八等)の心と全くうらはらなものでもない。本音はやはりそこにありながら、自身のさうでありえないところの彼の漂泊詩人のもつ憂愁の心の底をみるといふことも出來さうである。森本治吉博士が歴大な「高橋蟲麻呂論」の中でこの彼の旅の歌にふれて「万葉諸歌人の旅の歌は通例叙景歌の形をとるか、家人郷土への思慕の形をとるか、二つの姿で現れる。……蟲麻呂の筆は家郷への思慕を綴らない。彼は旅した土地の山川の姿

に背を向ける。そのこの伝説に眼を開く。……旅の歌らしくない旅の歌。後世の学者評家は、黒人赤人は旅の歌人に数へつつ、蟲麻呂を此の範疇から追ひ出してゐる。彼の旅の特異さが後人の眼を眩ましてゐる故である。此の外殻を突きぬけて旅人蟲麻呂としての彼を取上げない限り、彼の特性はいついまでも理解の彼岸に残されるであらう。」〔國學雜誌〕オ二卷(五)と鋭くつかれた問題点を、私なりにかく考へ、又以下の如く考へようとするのである。

彼のこのやうな孤独な漂泊性がやがて、その土地土地の伝説に心ひかれてゆくみちすぢを、ここに容易に考へることが出来さうである。浦島伝説をよんだ歌には「春の日の霞める時に 住吉の岸に出で居て 釣船のとをらふ見れば 古の事ぞ念ほゆる云々」(九卷一七四〇)と、彼はまづ住吉の海辺に一人たたずんで、この地の古の回想に身をおく。かくしてこの地の心のふるさとでもある浦島伝説の世界に我心をはるばる遊ばせ浸らせてゆく。浦島子の生涯を語り終へた彼は、さういふ浦島子の家のあつた地がみえると長歌で結んで、ここには春霞の海辺の気分と古い伝説と作者の旅愁が鏗渺とただよつてゐる。反歌で彼は再び浦島子のこと及び「常世辺に住むべきものを劔刀己が心から鈍やこの君」(九卷一七四二)と歌つてゐる。これは彼の批判といふよりむしろ民衆の心になつての共鳴である。彼の孤独な心が生む民衆の心への郷愁でもある如くである。筑波山の謡歌会をよんだ歌には「幸ひて 未通女壯士の 行き集ひ 嬢歌ふ嬢歌に 他妻に 吾も交らむ 吾が妻に 他も言問へ云々」(九卷一七五九)と土地の民間行事に打興じ、反歌「男の神に雲立ち登り時雨ふり汁れ通るとも吾還らめや」(前二七六〇)といふ熱狂的な打込み方は、異常なものであればあるだけ、蟲麻呂の眞の心は別なと

ころにある故ではないかとすら思ふのは、あまりに臆測にすぎるであらうか。それにしてもここには作者の個を感じ出させないくらくら、一見民衆とともにある作者の心が歌はれてゐる。

しかしそれがやはり意識的であることは、彼が大伴卿とともに夏の筑波山に登り興をつくす長歌の反歌で「今日の日にいかにか及かむ筑波嶺に昔の人の来けむ其の日も」(九卷一七五四)に、最も明らかである。彼の民衆の心への傾倒、それはかなり打込み方の深い、そしてこの場合のやうに総じて旅の慰めの一興にすぎないものの如くである。しかもその事が又彼の全部でもあり本領でもあるやうな漂泊詩人の、いふなれば類陪的性情とでもみられないだらうか。この官能的欲楽の歌もこれを一枚裏返せばかの秋色の筑波山の旅愁にもなるものではないか。彼は旅の詩人らしく地名を突に多く歌ひ、これをたとへば「三粟の中に向へる 曝井の絶えず通はむ彼所に妻もが」(九卷一七四五)「遠妻し高にありせば知らずとも手綱の浜の尋ね来なまし」(九卷一七四五)といふ風に、女性への関心、興味と関聯させて歌つた。とくに前者の那賀郡の曝井の歌は、常陸風土記にも曝井の記事がみえ、そこには村落の婦女が集る記事もあり、土地の風俗をふまへた原初的な女性憧憬が筑波山の嬢歌会歌と同類の民謡的(民衆的)発想で歌はれてゐる。

(三)

蟲麻呂の伝説の歌は、浦島子の歌以外は全く人間世界の恋愛に關するものが題材である。もつとも伝説といつても万葉のいはゆる伝説歌は正しくは民間説話であり、それは殆どがこの恋愛が主題であるわけだが、彼のあつたものは、手兎奈や菟原処女の美しい恋

愛感動を歌つたものと、一方筑波山の蟬歌会や、珠名娘子のやうな官能的女性の憧憬をよんだものがある。とくにこの性欲的官能的な面は、万葉作家の中ではめづらしい点に注目され、かやうな感覺性はどちらかといふに客観的であるが、その奥にひそむ蟲麻呂の心をたぐり出せば、吉田精一氏もいはれる如く、どこか近代的詩人のもつ類唐に通ふものがあり（「万葉集の類聚」二卷、所收「万葉集の類聚」二卷、所收）、それは前述のやうな民間伝説の中に浸り入らうとする孤独な漂泊詩人の心と深く関聯してゐる。このことは再びかの「河内の大橋を独去く娘子」における肉感的な女性描写と、その彼のはからずもらした本音とを、ここに想合せてみれば一層肯かれると思ふ。彼の作品中でも最も純粹な客観描写のなされてゐる上総の珠名娘子の歌をとつてみると、ここには作者の直接の感動は全くないが、魅惑的な美女の容姿や行動に不思議な感興を覚えてゐる事がわかり、岡崎博士の言葉を借りれば「妖艶な少女から発散する情調が、正しく作者の感動の揺曳を暗示して、抒情的な空氣の濃厚なものになつてゐる」（「万葉集の類聚」二卷、所收「萬葉集の類聚」二卷、所收）とすらいへる。これは女性的なものを扱つてゐるせもあるが、赤人の客観描写より、一步情調的で、いふなら家持の「春の苑そのれなむにほふ桃の花ふそした照る道に出で立つふな娘なな」（十九卷四二・三九）や「もののふのふ八十そをとめめ等が抱み乱らふらふ井の上のか堅香か子この花」（十九卷四二・四三）等の歌における情調的なもののおびる一種の抒情性にむしろ近づいてゐると思はれる。作者の全生命的なものを対象にぶつけるのでなく、作者の我は対象から一定の距離を以て、彼の近代的孤独の我が女性的な官能に溺れやうとする姿勢すらもつてゐる。彼は藤原宇合等との交渉により支那の遊樂的、文人趣味的影響もつけたかと思はれるが、この

唯美的気分、情緒の表現の奥には、万葉前期にはみられぬ、すでにある類唐的な芽生えすらうかがへるのである。それは又奈良朝の歌人、赤人・憶良・旅人等が夫々もつ個性的自我としての蟲麻呂の個性格とみることが出来る。

さて、蟲麻呂が一方、かの真閑手尾奈や菟原処女のやうな純粹な恋愛感動的な主題をも歌つてゐるのは、一旦矛盾する如く考へられるが、ここにみてきたやうな蟲麻呂の自我にして、又はじめてかういふ恋愛感動的素材が叙事的生彩さを以て歌はれたともいへる。彼にとつては、さういふ説話の世界は何か純粹に美しいものへのあくがれではなかつたか。しかも彼には、その世界への没入を冀求しつつ、そのことを完全に可能ならしめぬ、自己の内における対象との距離があつたればこそ、感動の世界がそのまま対象化されて客観的な芸術的構築のなされた所以があるのではないかと思はれる。即ちここでは、「香具山かぐまはか敵火かを愛あしとと耳梨みみとと相争あひひきき神代かみよりよ斯かくなるからしし古昔こもも然しかなれなれれこそそ現身みもも争あふふらししき」（中大正一三）といふやうな、伝説の恋愛がさながら現身の自分の心と一体になりきつてゐるのでは全くない。蟲麻呂のゑがく伝説は彼にとつて自己のあくがれを深々とよせる世界であり、その民衆の世界に浸りきらうとするところの縮れもない自己の世界がある。かくして歌はれてゆく過去の恋愛事件や、その中の女性的官能の生じた描出は、彼のこのやうな内面の心を以て、客観風に物語られてゆく手法の、即ち物語詩を生んだのであつた。

ここで、はじめに保留した蟲麻呂の叙事的性格の点について、いささかふれておく必要がある。かの人麿が、たとへ完全な叙事詩ではなくとも民族や国家の公共的な歴史を、その集団（特定の集団

で、厳正な意味の民族集団ではないの意志や感情に潜在することにおいて語り歌つた場合の、古代的叙事詩と、蟲麻呂のそれはかなりはつきり區別さるべきであらう。又彼と同時代の憶良の長歌が、個人的人生や家庭を歌つて人鷹のそれと全く違つた小説的構築をもつてゐるのに対し、蟲麻呂のそれは、民間の恋愛説話をあつかつてその中の人物——主として女性——の事件や運命、或はその風貌を蟲麻呂個人の魂を以て結局は表現しようとしたものであつた。かかる場合はその描出がいかに叙事的に生彩を以て語られてゐやうと、一個人の心でもつてなされる一女性への関心、憧憬であり、或は恋愛的感情の感溺に外ならない。かういふものは叙事詩といふ韻律を以てなされるべきものでなく、むしろ散文（即ち物語）においてなされるべきものといへよう。ここに蟲麻呂のは、古代的叙事詩の世界からは、およそはるかにへだたつた異質の心の世界であることをするのである。又それは或る意味で、既に完全に成熟した個人の抒情詩が、蟲麻呂の頃には何か新しい別な方へ動き出さうとしてゐた現はれとも考へられる。

結び

蟲麻呂の物語詩は、かくて抒情詩的表現の一変形とむしろみるにふさはしいものではないであらうか。蟲麻呂以後家持によつて、猶純粹な短歌といふ抒情詩（ジャンル）のままで新しい特殊な抒情世界が、天平勝宝五年二月のかの有名な教首（十九卷四二五〇—四二五二）の中でわづか、きりひらかれたが、既に蟲麻呂のこのあたりに、万葉の純粹抒情詩の中に、何らか別の展開が萌されてゐたとみること、いささか独断にすぎるであらうか。序でに猶一層の大胆な仮想

がゆるされるなら、かの定家が古今集を經た新古今集の抒情の世界に、物語的小説的構築になる艶なる情調の世界を芸術的に創造した意味と、或はかの蕪村が芭蕉の抒情世界から唯美的感覺と人事的事件の感興によつてわづか芸術の世界を獲得した役割とに、幾分似通つたものを、蟲麻呂は、人鷹やその他の万葉初期作品に対して行つたとも考へられる。そしてそれは蟲麻呂においては、物語文学への必然的內面的展開といふ文学史的意義の重要な一端を担つてゐるのではないかと私は考へるのである。（三〇・六・一一）

附記

(一) 蟲麻呂についての拙稿のやうな考へを久しい間もつてゐた時、嘗て（二十七年十一月）東大の国語国文学会で発表された犬養孝氏の「蟲麻呂の心」に共鳴する点が多かつた。但し私は、これを全部、拜聴してゐなく、又これが印刷の論文になつてゐることを知りえないまま、私は私なりの考へをまとめてみた。

(二) 拙稿は編集部から依頼を受け期間がなかつたため、今年、五月三日、文芸研究会（東北大学）総会において発表した論旨を、後日修正したものである。

併せておことわりをする次第である。